平成20年度全国学力・学習状況調査
第一次報告

この調査は、競争を目的とするものでなく、すべての子どもたちの学力や学習状況を把握し分析することにより、教育及び教育政策の成果と課題を検証し、その改善を図ることを目的としています。この調査により測定できる学力は特定の一部であり、学校の教育活動の一側面を示すものです。

調査結果の公表については、「過度の競争や序列化を招く」「市民と情報を共有すべき」など賛否両論がありますが、高石市教育委員会では、調査結果を公表することによって、学校・家庭・地域住民が共通の認識を持ち、高石の教育を見直す一つの機会にしたいと思います。従いまして、調査結果について、科目ごとの平均正答率、区分（知識・活用）の分析結果、今後の改善の方策などを併せて情報提供していきます。

今回の第一次報告では、「科目ごとの平均正答率」、「この調査結果から見えてきた課題」等を公表いたします。なお、第二次報告として「生活習慣や学習意欲の質問紙調査結果の分析や課題」、「学力向上等の対策」を今後、示していきます。

高石市教育委員会

平成２０年度　全国学力・学習状況調査〔高石市〕結果の概要について（第一次報告）

調査の概要（文部科学省実施要領より）

①調査の目的

ア.　国が全国的な義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、各地域における児童生徒の学力・学習状況調査をきめ細かく把握・分析することにより、教育及び教育施設の成果と課題を検証し、その改善を図る。

イ.　各教育委員会、学校等が全国的な状況との関係において、自らの教育及び教育政策の成果を把握し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

ウ.　各学校が、各児童生徒の学力や学習状況を把握し、児童生徒への教育指導や学習状況の改善に役立てる。

②調査内容

Ⅰ…教科に関する調査

小学校：**国語A・算数A（主として「知識」に関する問題）　国語B・算数B（主として「活用」に関する問題）**

中学校：**国語A・数学A（主として「知識」に関する問題）　国語B・数学B（主として「活用」に関する問題）**

Ⅱ…質問紙に関する調査（児童生徒対象・学校対象）

③調査対象

小学校・・・第6学年（高石市：7校　児童数：　620人）　**中学校・・・第3学年**（高石市：3校　生徒数：　490人）

④調査実施日

平成20年4月22日(火)および23日（水）

⑤調査結果の取扱いについて

○ 本調査は、競争を目的とするものではなく、すべての子どもたちの学力や学習状況を把握し分析することにより、教育及び教育政策の成果と課題を検証し、その改善を図ることを目的としている。

○ 本調査により測定できる学力は**特定の一部であり、学校における教育活動の一側面を示すもの**である。

平成２０年度　本市の校種・教科・区分別正答率

小学校		平均正答率		
		高石市（公立）	大阪府（公立）	全国（公立）
国語	A区分	**63.8**	62.7	65.4
	B区分	**47.8**	47.0	50.5
算数	A区分	**71.8**	71.2	72.2
	B区分	**49.8**	49.9	51.6

中学校		平均正答率		
		高石市（公立）	大阪府（公立）	全国（公立）
国語	A区分	**69.6**	70.5	73.6
	B区分	**54.1**	55.2	60.8
数学	A区分	**61.8**	60.5	63.1
	B区分	**44.5**	45.2	49.2

上表の本市平均正答率の数値データは、市内の全小学校・全中学校のデータに基づいて表しています。

平均正答率からわかる本市小・中学校別結果の概要について

◇小学校A区分（主として知識に関する問題）については、国語・算数ともに全国平均をやや下回るものの大阪府の平均を上回る結果が出ています。B区分（主として「活用」に関する問題）についても同じ傾向がうかがえます。

◇中学校A区分については、国語では全国平均を下回るものの大阪府の平均とはほぼ同程度の結果が出ています。数学では大阪府の平均を上回っています。B区分については、全国平均、大阪府平均を下回る結果となっています。

各教科に関する調査結果（高石市）の概要・・・小学校

平成２０年度調査結果から見えてきた課題（小学校）

国　　語

◆正答数の分布については、次ページのグラフ①《緑枠》より、ほぼ全国・大阪府と同じ傾向であることがわかります。ただB区分問題について、正答数０問（無回答）の割合が全国・大阪府より高く、答えを書かないで終えている子どもや、答えを導き出すことができない子どもが少し多くみられます。

◆「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」「言語事項」の各領域ごとについては、次ページのグラフ②〔国語A・B〕より、ほぼ全国・大阪府と同程度であり、問題形式別の「記述式」の項目に全国との開きが少しあることがわかります。言語事項に関する知識を取り出して自分の言葉で表現して書くことを苦手にしている子どもが多いようです。

◆出題された漢字の読み・書きについては、相当数の児童が理解していますが、文脈に合わせて漢字を書き分けたり、同音異義の漢字を書くことになると正答率が低くなります。

◆グラフから分かったことをメモに取ることや、資料から必要な情報を取り出して整理し、自分の言葉で表現することに課題があり、求められた形式や字数に応じてまとめて表現する力の向上を図っていく必要があります。

算　　数

◆正答数の分布については、次ページのグラフ①《黄枠》よりほぼ全国・大阪府と同じ傾向であることがわかります。ただ国語と同じように正答数０問（無回答）の割合が高く、答えを書かないで終えている子どもが少し多くみられます。また、正答数が多い子どもと少ない子どもの数がともに全国・大阪府より少し多くみられることから、よく理解できている子どもと、理解が不十分な子どもに分かれていることがわかります。

◆「数と計算」「量と測定」「図形」「数量関係」の各領域ごとについては、次ページのグラフ②〔算数A・B〕より、また、問題形式別についても全国・大阪府とほぼ同じ程度であることがわかります。

◆A区分問題の「数と計算」に関しては、相当数の児童が理解していますが、『６＋０．５』『２÷３の商を分数で表わす』『３＋２×４』等の整数と小数を含んだ計算、答えを分数で表したり、四則混合の計算の順序についてやや理解が不十分な子どもがいます。

◆A区分問題の「図形」に関しては、基本的な図形の定義や性質については、よく理解していますが、円周率の意味や二等辺三角形の定義については、やや課題があります。
　B区分の「図形」に関しては、図形を変えて考える発展的な場面で面積の関係をとらえ判断の理由を言葉や式を用いて記述することには、全国・大阪府と同様に課題があります。

◆A区分問題の「数量関係」に関しては、割合を求めることや、円グラフを読むことは相当数の児童ができており、全国・大阪府の平均を上回っています。
　B区分問題の「数量関係」では割合の考えを用いて判断し、その理由を言葉や式を用いて記述すること、また、グラフの特徴から内容を読み取り違いを言葉や数を用いて記述することに弱さがあります。

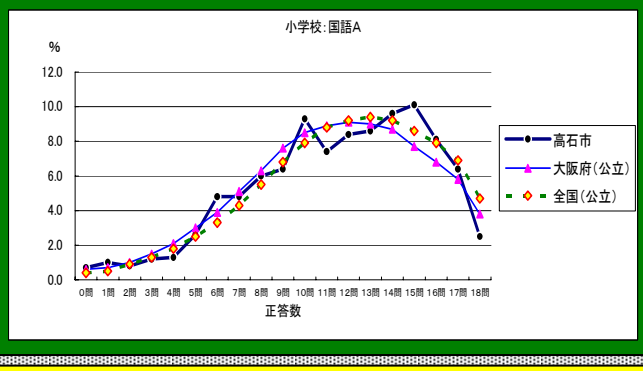
平成２０年度　本市正答数分布（小学校）

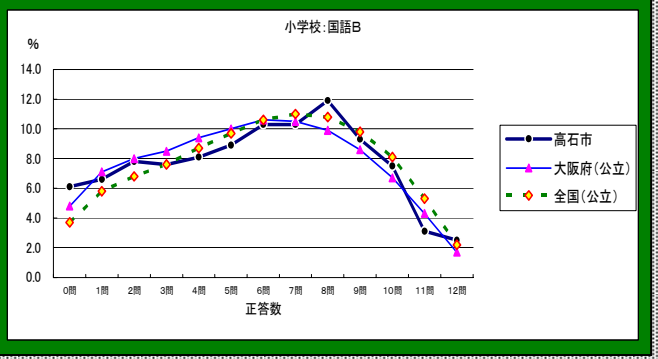
グラフ①

Ａ　区分問題（知識）

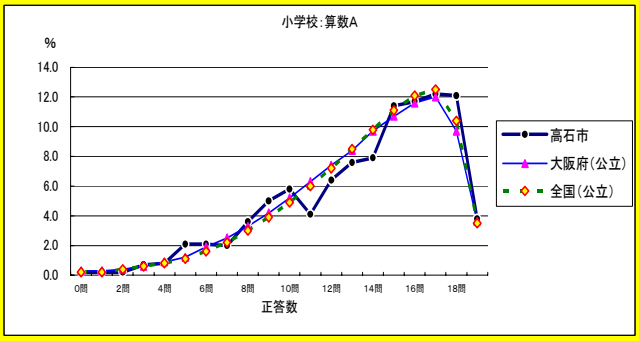
Ｂ　区分問題（活用）

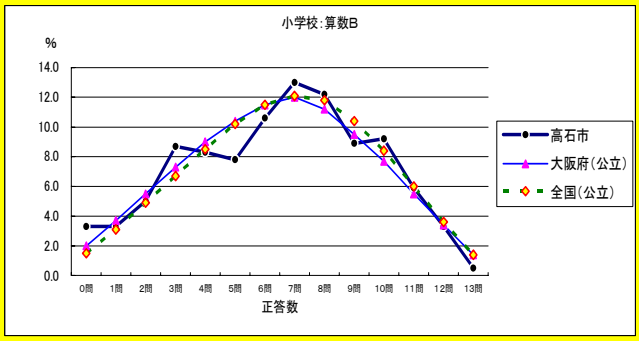
国語





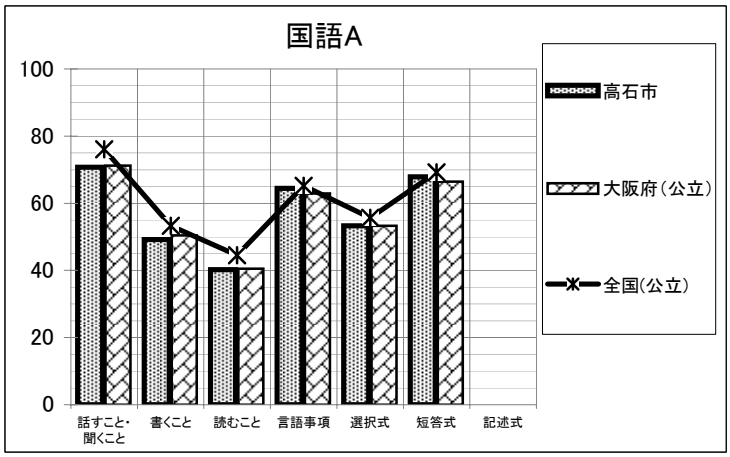
算数

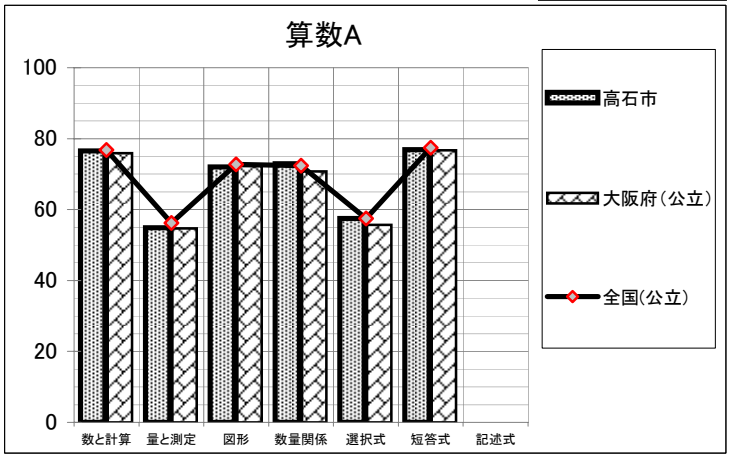


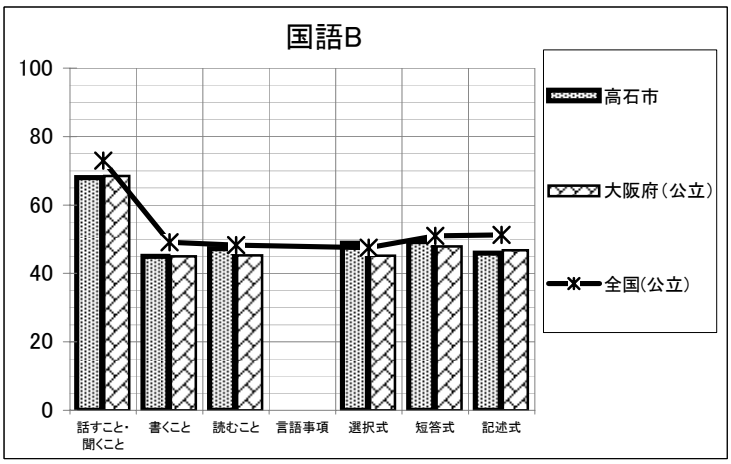


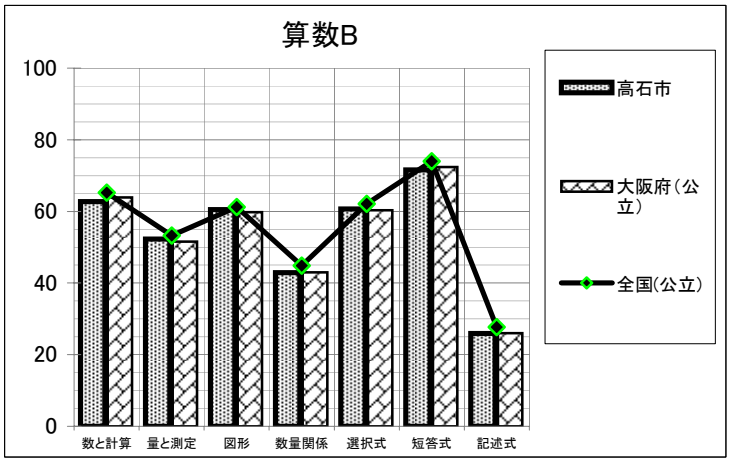
領域別・問題形式別正答率（小学校）

グラフ②









各教科に関する調査結果（高石市）の概要・・・中学校

平成２０年度調査結果から見えてきた課題（中学校）

国　　語

◆正答数の分布については、次ページのグラフ③《青枠》よりわかるように正答数０問（無回答）の割合が全国、大阪府より高く、答えを書かないで終えている子どもが多くみられます。正答数の人数にもかなりのばらつきがあり、また、よく理解できている子どもと、理解が不十分な子どもとの差も表れています。

◆「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」「言語事項」の各領域ごとについては、次ページのグラフ④〔国語A・B〕からもわかるように、A区分については、ほぼ全国・大阪府と同程度ですが、B区分については、領域別の「話すこと・読むこと」と、問題形式別の「記述式」の項目の⬇の部分で全国との開きが少しあることがわかります。全般的に、自分の言葉で表現する（「話すこと・聞くこと」「書くこと」）力の向上を図っていく必要があります。

◆出題された漢字の読み・書きについては、文脈に合わせて漢字を書き分けたり適切に使うことに課題が見られます。例えば「将来のことはヨソクできない」という場合の【予測】を正しく書けている子どもが少ないという結果が出ています。

◆「読むこと」に関しては、A区分では古文の中のまとまりをつかむ、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直して読むこと、論理の展開に即して内容を読み取ることに課題があります。
　B区分には、出題の趣旨である情報の中から必要な情報を選ぶこと、表現の仕方や文章の特徴に注意しながら読むこと、文章に表れているものの見方や考え方について、四字熟語を手がかりにして理解すること、目的を持って様々な文章を読み、必要な情報を集め自分の表現に役立てることに課題があります。

数　　学

◆正答数の分布については、次ページのグラフ③《赤枠》より、ほぼ全国・大阪府と同じ傾向であることがわかります。ただ国語と同じように、正答数０問（無回答）の割合が全国・大阪府より高く、答えを書かないで終えている子どもが多くみられます。また、正答数の人数にかなりのばらつきがあり、よく理解できている子どもと、理解が不十分な子どもとの差も表れています。

◆「数と式」「図形」「数量関係」の各領域ごとにについては、次ページのグラフ④〔数学A・B〕のとおり、A区分については、ほぼ全国・大阪府と同程度ですが、B区分については、「数と式」また、問題形式別の「記述式」の項目の⬇の部分で、全国と開きが少しあることがわかります。全般的に、自分で問題を読んで理解して解答を導くことに課題があります。

◆「数と式」については、A区分問題の中で相当数の生徒が理解しています。
　例えば『２×（－３^2）』『(5x－8)－２(x－３)』の指数や文字式の計算は、よくできています。しかし、A区分の「正の数と負の数で表した２つの市の最低気温の差を求める」問題や、B区分の「８２と、８２の十の位の数と一の位の数を入れ替えた数との和を式で表わす」問題等、問題文を読んで答える場合に、問題の内容が十分に理解できないのか、文章を読んでいないためなのか、誤答や無回答の生徒の数が多くなっています。

◆「数量関係」に関しては、A区分では、反比例や一次関数の関係を式に表わすこと、具体的な事象について表したグラフから、２つの数量の対応を読みとること等については、全国・大阪府を上回りよく理解できています。

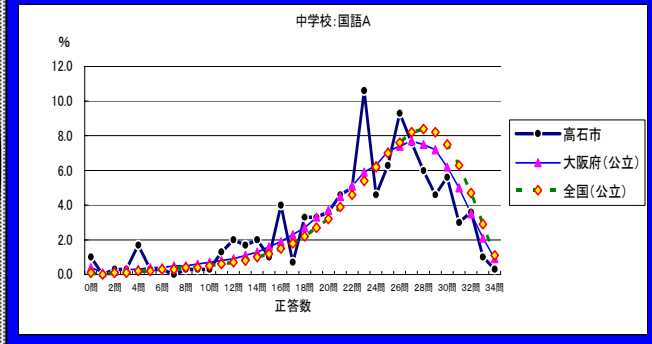
平成２０年度　本市正答数分布（中学校）

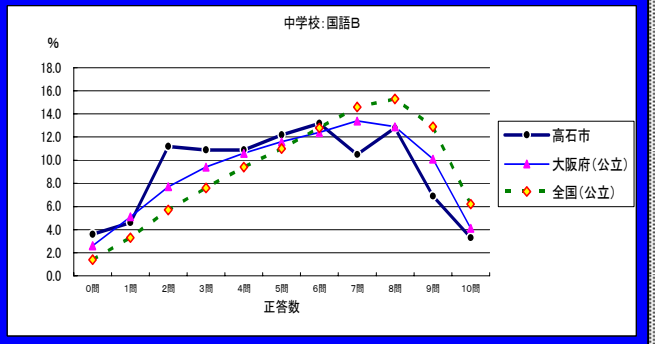
グラフ③

A　区分問題（知識）

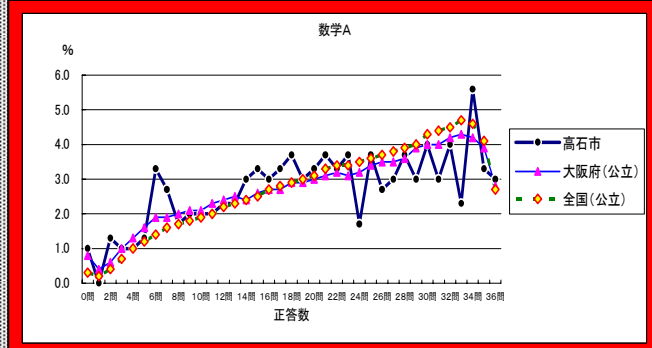
B　区分問題（活用）

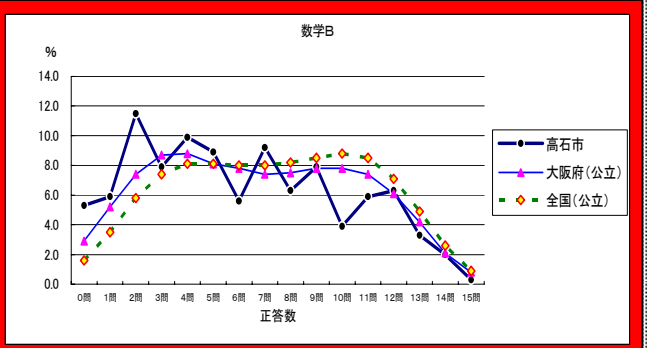
国語

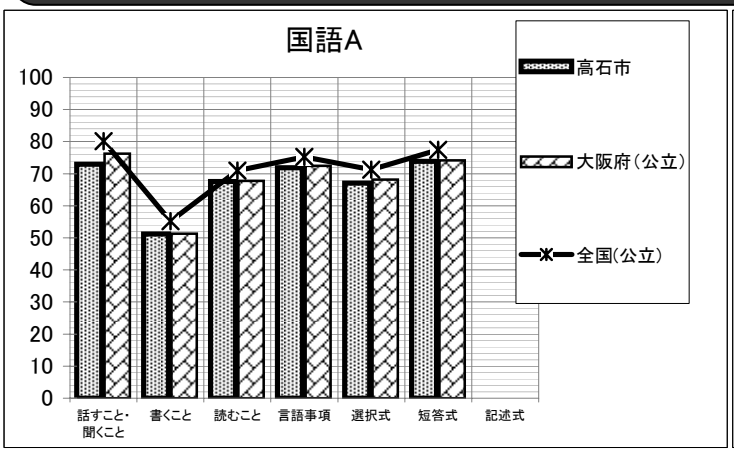
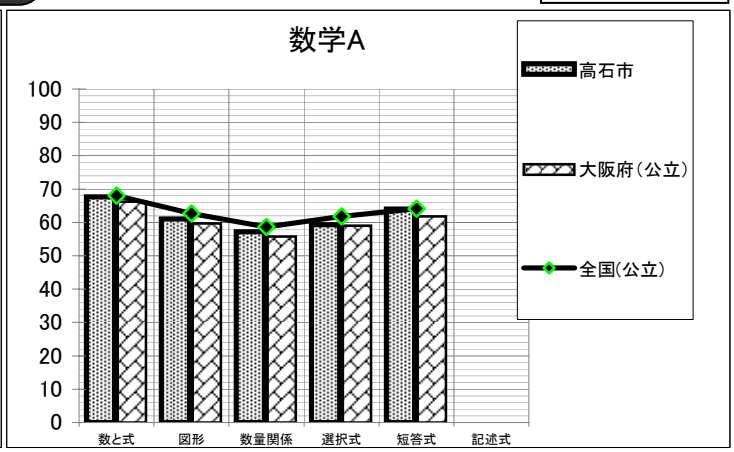
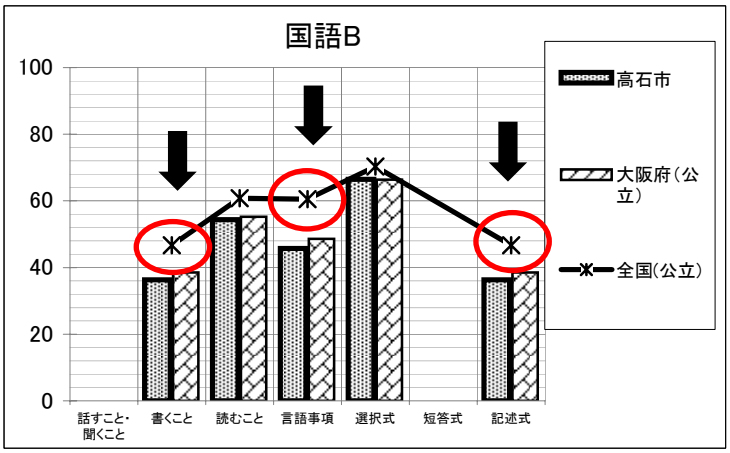
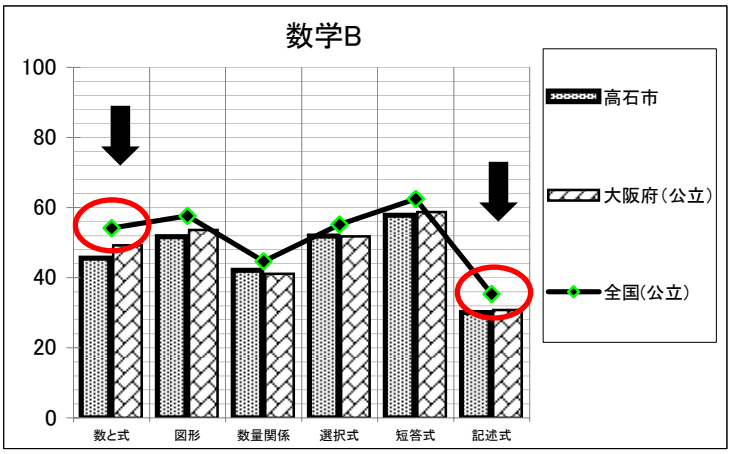




数学





領域別・問題形式別正答率（中学校）

グラフ④